

平成19年5月8日  
広島大学副学長  
二宮 皓

「アジア・ゲートウェイ構想：中間論点整理」に対するコメント  
(留学生・大学の国際化に関する部分)

3. 留学生政策の再構築関係のコメント

コメント1 ダブル・ディグリー等について

ダブル・ディグリー・プログラム(日本と海外の大学の2大学から同一分野あるいは異なる分野の学位を2つ取得する制度)に加えて、わが国の大学にとってもっと必要で有意義なプログラムが、いわゆるジョイント・プログラムとジョイント・ディグリーの制度を開発することである。これは海外の大学(複数大学でも可能)との間で、特定の分野に関するカリキュラムやプログラムとして、相互に補完しながら特色ある、質の高いものを開発し、修了者に学位を授与する制度である。たとえば広島大学がアジアの大学などと協議し、英語で授業を行う、カリキュラムを開発する。学生は広島大学にジョイント・プログラム(学位)学生として登録し、広島大学で一学期学び、2学期、3学期は海外の大学に留学し、そこで補完されるカリキュラムを履修し、4学期はまた広島大学に帰国し、修士論文を完成して、広島大学から、「修士(ジョイント環境研究)」(英文による学位記)(仮称)を授与される。その際学位記には広島大学長のみならず海外の共同大学の長の署名をもらう、といったイメージのジョイント・プログラム・学位制度の開発・展開が必要である。そのための法改正が必要となる。同時に日本の大学がリーダーシップを発揮し、海外の大学と協議・開発・実施するための奨励策が必要となる。

これにより日本の大学のアジアにおける指導性が高まり、日本の大学の価値をたかめることができる。このプログラムの学生は何も日本人だけではなく、世界から集まるものである。付加価値を高めたジョイント・プログラムを日本の大学は海外の大学と協議し、どこまで開発できるか、日本の大学の实力と真価が問われることとなる。

コメント2 日本人学生の海外体験学習機会の拡充(Study Abroad プログラム)

わが国の学生が海外の大学に短期間留学するプログラムについてはもっと大学が工夫し、少なくとも50%の学生が何らかの海外での学習体験をもてるような積極的取り組みが必要である。そのためには各大学とも今後は一般的な海外大学への短期交換留学プログラムだけではなく、それぞれ専門分野毎のスタディー・アブロード・プログラムの開発を促進する方策が必要である。その逆も可であり、留学生が1年とか4年とかの長期間留学してくるのではなく、2週間から1月程度の短い期間、日本の大学等で学べるようなスタディー・アブロード・プログラムやサマープログラムの開発・実施が有効であろう。それにより日本にきて学ぶという経験をもった海外の学生を大幅に増やすことができる。そのコストを負担できる学生はアジアに非常に増えているという現実を見つめるべきである。留学生は貧しい、という先入観を少し変える必要もある。